

ザ・シンポジウムみなと in 室蘭

「環境産業による地域活性化」 ～リサイクルポート室蘭港の将来の姿～

北海道開発局 港湾空港部港湾計画課

平成18年10月26日、ザ・シンポジウムみなと実行委員会主催によるザ・シンポジウムみなと in 室蘭が室蘭市市民会館で開催されました。

室蘭市では、「ものづくりのまち」としての高度な技術集積、室蘭港を始めとした物流機能、大学など研究開発機能を活用した産学官民連携による「環境産業都市」を目指した取り組みが進められています。

本シンポジウムは、平成14年5月にリサイクルポート^{※1}の1次指定を受けている室蘭港の静脈物流^{※2}ネットワークの形成とともに21世紀の新しいリサイクル・環境産業の展開による地域活性化の視点から室蘭港の将来の姿を市民の方々と描いていくものです。

当日は室蘭市をはじめ全道各地から300名を超える方々の参加がありました。

(財)北九州産業学術推進機構産学連携センターの青柳事業推進部長が北九州エコタウンの経緯と概要、北九州リサイクルポートの現状と将来展開および産学民の連携の現状やまちづくりへの展開等について基調講演がなされ、プレゼンテーションでは室蘭市内で環境産業に取り組む4社（新日本製鐵㈱、新日本石油㈱、日鐵セメント㈱、日本環境安全事業㈱）により事業について紹介がなされ、トークセッションでは室蘭工業大学の齋藤理事をコーディネーターに、青柳部長、室蘭市の新宮市長、国土交通省港湾局環境整備計画室の八尋室長により、リサイクルポート室蘭港のあり方について意見交換がなされました。



基調講演

「リサイクルポート北九州港の環境産業とまちづくりの展開」

あおやぎ ゆうじ
青柳 祐治 氏

(財)北九州産業学術推進
機構 産学連携セン
ター事業推進部長

北九州は皆さんがご存じのとおり、室蘭と同じ鉄の街として有名であり、1901年に官営八幡製鉄所が操業して以来、急速に工業化が進み、





こさき よういち
小崎 洋一氏
日鐵セメント(株) 資源
リサイクル部長

通常のセメントより製造工程で二酸化炭素を半減できる高炉セメントを主体に生産しています。日鐵セメントではこの高炉セメントが主力製品となっています。国内のセメント業界は公共事業などの縮小による需要減少にともない生産量も減少していますが、リサイクル関連の使用量は増加しています。

セメントの主成分はカルシウムやシリカであり、これは、大部分の副産物や廃棄物にも含まれているものですが、高温で焼成することによりダイオキシンなどが発生せず、残りかすはセメント成分として再資源化することができます。セメントの製造過程では、石炭灰、下水汚泥、廃プラスチックなどを燃料の代替として利用しています。



ゆい まこと
油井 理氏
日本環境安全事業(株)
北海道事業所長

国が100%出資するポリ塩化ビフェニール(PCB)処理の特殊会社であり、北海道事業所は道内のほか、東北、北陸など15県のPCBを処理します。PCBは自然界に流出すると食物連鎖の過程において濃縮され、人間の健康に害を及ぼします。

2001年にできたPCB特別措置法において、国内で発生するPCBの全ての量を処理することになりました。室蘭の処理工場は新日本製鐵(株)室蘭製鐵所構内の敷地を借用して今年2月に着工し、2007年3月に試運転を行って10月から本格操業する予定です。道外から輸送されてくるPCBは、船舶もしくはJR貨物により安全に輸送できるルートを検討しているところです。

トークセッション

コーディネーター

さいとう かずお
齋藤 和夫氏

室蘭工業大学理事

室蘭市は2001年に環境産業推進協議会を立ち上げ、環境産業の拠点を目指しています。また、室蘭港は2002年、リサイクル産業の海上物流拠点を指す「リサイクルポート」の指定を受けています。

新宮市長には、環境産業に対するこれまでの室蘭の経過、環境産業の視点から室蘭はどんな姿を目指しているのかを、八尋室長には、国の環境産業に対する考え方や室蘭港への期待を、青柳部長には、北九州のエコタウンの取り組み状況や室蘭への提案をそれぞれお話していただきたいと思います。



スピーカー

しんぐう まさし
新宮 正志氏

室蘭市長

室蘭には企業による高度な産業技術基盤や人材、大学などの研究機関がありますが、2001年当時の室蘭は現在のように基幹産業の活況がなく、ものづくりのまちをどのように発展させていくかが課題となっていました。そのような状況下において、環境産業の拠点形成を目指すという動きがでてきました。

先ほどのプレゼンテーションで紹介されたように、新日本製鐵(株)の廃プラスチックのリサイクルや、日鐵セメント(株)のキルン(セメント原料を燃



え殻の固まりにする窯)を活用した汚泥、肉骨粉などの原燃料化、新日本石油㈱のレコサールなど現在様々な環境産業が活動しており、産学官民の連携によりものづくりのまちを推進しています。

環境産業拠点をつくるには、地域全体が取り組むことが大切であり、産学官民の連携を強くしていくことにより室蘭の特徴を活かしていきたいと考えています。

室蘭港の臨海部には広域な用地があり、輸送ネットワークを活かせる強みがあります。PCB処理事業において、道外からの搬入はフェリーを活用し、リサイクルポートにふさわしい活用を促進したいと考えています。

しかしながら、海上輸送には法律による規制が厳しく、例えば、特殊な容器により輸送することによって、海上運搬を可能にするということを考えるなど、環境産業の推進のためにも見直しをお願いしたい。

スピーカー

やひろ あきひこ
八尋 明彦氏

国土交通省港湾局環境整備計画室長



21世紀は循環型社会の時代と言えます。経済と環境とを両立させることが持続的な発展につながると考えられ、国土交通省の推進するリサイクルポートは循環型社会を支援する施策のひとつです。

リサイクルポートには、循環型社会の支援とリサイクルを通じた地域づくりの役割を持っています。国内の港湾取扱貨物量は2000年と比較して、2004年は6%減少していますが、循環資源の港湾取扱貨物量は逆に6%伸びており、港湾の活性化につながります。

室蘭港背後には高速道路や鉄道が整備され、リサイクル技術を持った産業が存在し、国内有数の水深16mの岸壁を有する天然の良港であり、潜在能力が高いと考えられます。



スピーカー

青柳 祐治氏

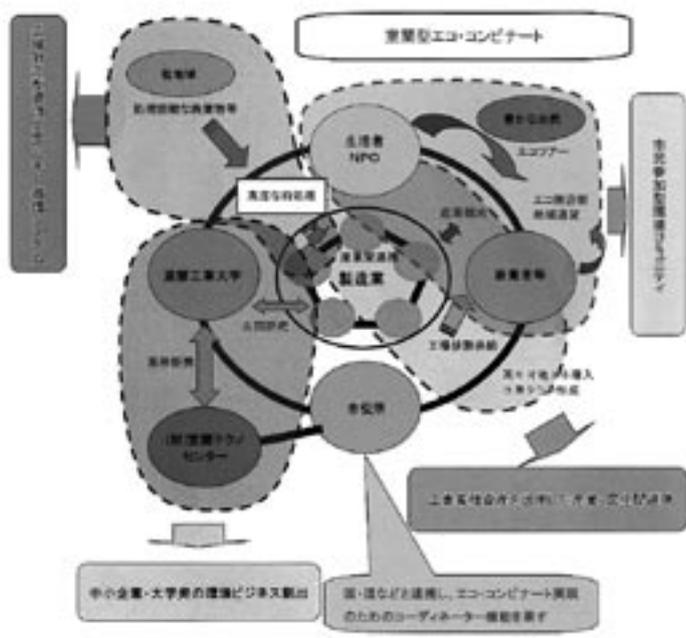
北九州では市民に冊子を配布して、ゴミの減量やリサイクルの意識を高めています。また、宣伝や情報発信により企業の従業員が自

分の仕事に誇り持つ効果があります。室蘭でもリサイクルを実感できる商品を開発して、ブランド化するとよいと思います。

北九州は、プラスチックの需要が多い中国に資源を搬出したり、東南アジアなどで自国では処理できない循環資源を搬入して処理するなど、国際資源循環を活発化させてアジアにおける拠点を目指しています。室蘭ではロシアとの国際資源循環連携を考えてみてはどうでしょうか。

「環境ブランド」形成戦略

「環境ブランド」を形成するには、中小企業や大学、市民、NPOといった主体による取組みによって環境にやさしいまちづくり・くらしづくりや産業づくりが進められることが望まれます。エコ商店街やエコツアーといった身近なプロジェクトを定着させ、その効果を目に見えるかたちで市民や市内外に発信することで、「富良野地域環境ブランド」の波及効果とともなる深さを期待するものです。そして、それを、行政コーディネートによる産学官民連携モデルという推進力によって、目指すものです。



*1 リサイクルポート（総合静脈物流拠点港）とは、広域的なリサイクル施設の立地に対応した静脈物流ネットワークの拠点となる港湾であり、港湾管理者からの申請により国が指定し、拠点づくりを支援するもの。
*2 静脈物流とは、人の血管に例えて、動脈物流である製品系の輸送に対し、生産や消費活動で排出したものの輸送をこのように表現する。